



祐介の目

大田ゆうすけ

(福山市議会議員)

No.50

毎月1日号に掲載

と学習」はもとより、まちづくりの拠点喪失が地域に多大な影響を与えることは間違いない。拠点なき後の対策はどうするのか。

しかし、山野小学校の児童はわずか5人、毎年春に開催される「山野峡山開き」における児童の姿が年々減少する様子を見ると、再編やむなしという気もする。実際、山野から加茂に転出した家族や、内海に住みながら学校選択制により学区外の沼隈の学校に通う児童生徒も多い。逆にこれらの学校は他地域から移住してきた住民の子供達により支えられている実態がある。

「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった」という川端康成の「雪国」と同じような感覚を覚える山野町。標高500mというはるか天空の集落・広瀬町。田島・横島からなる内海町。それぞれの町において5年後を目的に小中学校を再編する計画が教育委員会から発表された。

山野と広瀬の児童生徒は加茂へ、内海の児童生徒は沼隈の千年へ通うことになる。しかし、山野町を流れる川は井原を流れて高梁川に注ぐため、古くから井笠地方との交流が盛んな地域であり、加茂とは異なった歴史や文化を有する。広瀬や内海も同様に独自の文化を有し、空き家バンクにより移住者を受け入れたり、不登校等の課題のある児童生徒を積極的に受け入れたりする努力をしてきた。地域住民が再編計画に反対するのにも無理もない。地域ぐるみで取り組んできた「ふるさ

学校を存続させる方策として、他地域に転出した一家が地元に戻ったり、学区外に通う児童生徒が地元の学校に戻ったりする事ができるかどうかだと思っ。また、教育委員会は、再編校の教育環境を現状より後退させる事はないと議会で説明している。であれば、山野・広瀬の小中学校は隣接しており理想的な小中一貫の少人数教育が行われ、中学校給食も提供されている。再編後の加茂中学校でも同様の教育環境を構築できるのか、これらを示すことができない限り、住民も議会もおいそれとは賛成できないだろう。

